

茨城県現代俳句協会会報

〔秋尾敏副会長特選句〕

「秋尾敏」全句講評

講座 in 茨城

十一月十六日水戸の青少年会館に於いて、

現代俳句協会副会長の秋尾敏氏（軸主宰）に

による全句講評講座が行われました。

協会本部より大石雄鬼事業部長もお迎えし

ての講座は、和やかな内にも講師のお言葉を

一言も聞き洩らすまいと、出席者二十三名の

何事にもまして真剣なまなざしがありました。

満足と誰が決めたの冬苺

〔受講者句〕

鶴口となれず生涯草紅葉

鈴生りの林檎に格差なき日照り

ことの他尿に力や今朝の冬

大根を提げてぶらりと女客

着ぐるみに抱きつく園児冬ぬくし

小鳥来る蛇口の低き幼稚園

線条の雨帶の裾かたつむり

新蕎麦のふるふる盛られ隣席

講師の秋尾敏先生



No.140

2022年3月

登高の孔子もこもる角櫓

長谷川 進

還七でセルフ給油の銀河行き

”

長葱抜く緊急事態解かれたる

高野よしこ

冬の虹元素となりし少女かな

見えぬもの恐れる人間蝶躑躅わらふ

詠び箱に残りし尻や秋夕焼

塩谷きみこ

よちよちの赤い靴から跳ぶ飛蝗

”

置き去りの新藁ぼづちと鎌ふたつ

村田 妙子

天高し祖母の気合の菊花展

”

鶯の天言ひたきことは紙に書く

宮路 久子

三把買うちおまけに白の菊一花

新井 洗澄

てのひらに情の生まるる模様の実

根本菜穂子

軒先にさまざま吊し冬に入る

高橋 和彌

目測の誤差にずれこむ夜なべの灯

安田 政子

バリウムの白い迷走秋時雨

斎藤 和子

満足と誰が決めたの冬苺

山田 美枝子

鶴口となれず生涯草紅葉

笠原 勝介

鈴生りの林檎に格差なき日照り

山田 健太

ことの他尿に力や今朝の冬

”

大根を提げてぶらりと女客

”

着ぐるみに抱きつく園児冬ぬくし

小松崎黎子

小鳥来る蛇口の低き幼稚園

”

線条の雨帶の裾かたつむり

白土 昌夫

新蕎麦のふるふる盛られ隣席

”

この影とわが影一对秋深し

宮路 久子

初紅葉垂れを多めに手打ち蕎麦

飛田 伸夫

参道の砂利に転ぶ児菊日和

”

筑波峰ぐるりとひと日秋さくら

新井 洗澄

秋澄みぬ木の葉のように雀地へ

黒澤みどり

仏壇の前に長居し秋深む

”

振りむけば風音ばかり赤とんぼ

浅野とし子

つり橋のゆらゆら釣瓶落としかな

”

かりんの実腰落ち着かぬ妹がくる 岡里 共子
 かりんの実大人の塗り絵塗り潰す " "
 斎田晴会津盆地の風惑つ " "
 腕自慢地産地消の走り蕃麦 " "
 二年ぶりの妹とのランチ柿日和 " "
 原郷は斎田の泥濘るあたりかな 根本菜穂子
 老いて猶人肌を恋うぬくめ酒 " "
 国らずも長生きをして茱萸の酒 佐藤 和子
 冬隣予防注射の針光る " "
 仙人の如くの暮し実南天 森井 省二
 肩書のいらぬ余生や吾亦紅 " "
 ひとと手紙のような秋驟雨 安田 政子
 嘴んでみるからすみの味考の味 齋藤 和子
 音もなく過ぎていくなり八十の秋 東ヶ崎禎子
 宇宙の日宇宙食吟味夢ごとし " "
 虫しぐれ奥行深く花屋跡 梅井 玲子
 秋天や埠頭の積荷みな方形 山口 富雄
 惡役を買って出る日の青時雨 鈴木 葦江
 稀有なるや稻架干しの米頂戴す " "
 生命線さすりて夢と居る長夜 青山 向日
 女子ニース防風ネットの冬すみれ 山田美枝子
 大花野見つけてくれぬかくれんば 宇津野登久子
 原発の連なる列島虎落笛 " "
 冬ぬくし粗忽長屋の『べらんめえ』飯田ヒロ子



○ 特集・永年会員記念作品

二階には鳴らないドラマ星月夜 飯田ヒロ子
 たんぽぽのぼぼに始まる契の旅 小沼 悅子
 洗濯機のそうちつ病や台風来 " "
 硝子戸の片方だけの残暑かな 高野紀世子
 (当日欠席の三名も掲載いたしました)

ございます。50年、40年、30年に到達なさった方々の記念の一句です。
 詞益々お旺んなことを祈念しております。

50年永年会員作品

冬ざくら一人ひとりの水ほめら 木村小夜子

40年永年会員作品

唐辛子振ればまつ赤な音すなり 中山 秀子
 竹の花風鎮かな日遺書認め 成井 恵子

30年永年会員作品

青胡桃八十路の坂をまだ登る 秋山ふさこ
 枯野には卵を飲んで来て座る 小林しげる

(令和3年12月号「現代俳句」より転載)

《お知らせ》

☆鶴岡しげを氏が、茨城文化団体連合功労者として表彰されました。
 ☆毎日新聞第25回毎日俳句大賞入選されました。

無医村に生き存えて夕端居 飯塚 美紅

★令和四年度通常総会・句会を左記の通り開催致します

記

日時 令和四年四月二十九日（昭和の日）

会場 茨城県立青少年会館

開会 十三時（総会終了後に句会開催）

※同封の葉書に総会への出欠と、出席予定の方は投句を、欠席の場合でも必ず委任状をお送り下さい。

★第三十九回現代俳句茨城大会を左記の通り開催致します

記

日時 令和四年七月十八日（海の日）

午前十一時開会

会場 茨城県立青少年会館

講演 演題「現代俳句の未来」

講師 佐怒賀正美先生

現代俳句協会副幹事長

「秋」主宰

当日句会 課題「美」（投句締切り十一時）

★作品獎励賞募集停止について

第30回作品獎励賞については、今後どのように形で募集をするのかの検討を、選考委員会で本年一年間協議し令和五年度に募集することと致します。

山田健太鑑賞

退院の我が家の匂い小鳥来る 井沢とよ子

令和三年度新入会員のご紹介

板羽 未知子（龍ヶ崎市）

関口 登司郎（龍ヶ崎市）

小沼 悅子（行方市）

高野 紀世子（行方市）

飯田 ヒロ子（行方市）

水蝶 まゆみ（東茨城郡）

会報139号掲載

「私の一句」鑑賞

森井省一 鑑賞

真木女史の転生かとも黒揚羽 小松崎黎子

生まれて数時間で動き出す馬の仔。見るもの触れるものがまさに新鮮そのもの。句は仔馬のいきいきとした姿態を躍動的に描き出す。座五の「好奇心」が、句の中で輝きを發揮している。

薰風やベットの傾斜八十度 高橋三智子

炎帝主宰真木先生が急逝されてから三年が過ぎ去ろうとしているが、良き句友であった作者は未だに忘却することなく、黒揚羽の飛来も真木女史が生まれ変わつて逢いに来たのかもとしたため呉れたことに、真木主宰の門人として感謝とともに深い感銘を受けた一句です。

他の作品では

風呂敷も畳も四角文化の日 糸賀睦子

扁平の仏足石や沙羅の花 永井淑子

病気が癒えて、我が家へと帰宅。迎えてくれたのは、家族の笑顔と家の内外にある見慣れた家具や庭の草木。それぞれに永年親しんだ匂いが、溢れ出て快復を歓迎しているようだ。そして、小鳥来る季節。この我が家のかしこが、全快へと後押しするのである。

馬の仔の四肢にみなぎる好奇心 神谷たくみ

地区別会員句会 第一回

県南地区は通信句会で実施

県現代俳句協会会長 高橋和彌

県南地区俳句会は、令和4年1月23日、行方市天王崎交流センター「コテラス」を会場に開催を準備してきたが、新型コロナ第6波の為急速通信句会を余儀なくされた。この句会は総会方針を基に計画された現俳協会員のみの句会で、県南地区を皮切りに今後県西地

区、県北・県央地区と順次開催の予定である。

従来、県境俳協の開催する句会や行事は総会を除き広く会員以外にも参加を呼びかけて

きた。それが県現俳協の力となり、県俳壇の活性化に寄与してきたことは言うまでもない。この度の取り組みは、この上に立つて協会員同士の融和と質的向上並びに今後の県現俳協発展の糸口を見つけることがある。

句会の開催方針としては①前述の地区別として地区協会員が参加しやすい地理的会場の確保。②当地区協会員の俳句にこだわらぬい講演の場を設ける。③会員減少など現状の問題点を話し合い認識を深めること等が上げられる。

この度の県南句会は行方市を会場に地理的

条件も良く、県南協会員を中心に17名の参加申し込みがあつた。通信句会となつたが全参加者に選句と特選句の講評を頂いた。また会員であり彫刻家である宮路久子氏に講演の準備をして頂いていた。宮路久子氏は二科展作家であり県彫刻界のホーリーとして昨年暮れ茨城新聞でも大きく報道された作家である。

残念であったが次の機会を待ちたい。
神妙に鳥の来ている水面鏡 村田妙子
待春や素焼の鉢の鱗ふかし 佐藤和子
参加者作品(句稿順)

茨城県現代俳句協会南部俳句会(紙上句会)

十七名参加

第八位 4点

母の髪梳いてる窓辺日脚伸ぶ 伊沢とよ子

第九位 4点

神妙に鳥の来ている水面鏡 村田妙子

第十位 3①点 特 省二

待春や素焼の鉢の鱗ふかし 佐藤和子

参加者作品(句稿順)

強風に枯野は鬱を離しけり 高野よしこ

小さき碑に句意のはばたく梅三月 新井洗澄

北斎の袒袍ぬけがら白帆の湯 小沼悦子

焼いものとろり溶け出す笑顔かな 高野紀世子

寒夕焼湖を従え富士の山 飯田ヒロ子

村田妙子特選

松明けて隣家解体けたたまし 高橋和彌

安藤玲子特選

よろよろと口差し求めて冬の蜂 菅原仲江

宮本喜実世特選

雪催い変われぬ弱さ持ち生きる 山口富雄

宮路久子特選

昭和歌にのりてエアロや喜寿の春 糸賀睦子

探梅や水琴窟に身を屈め 菅原仲江

昭和歌にのりてエアロや喜寿の春 糸賀睦子

佐藤和子特選

北国に生まれ育ちて雪嫌い 高橋和彌

小松崎黎子報

地区別会員句会特選講評

新井洗澄選

⑤人ひとり加わり焚火持ち直す 宮路 久子

感を感じる仕上り。写生の中に美がある。

安藤玲子選

⑧よろよろと日差し求めて冬の蜂 菅原 仲江

冬の蜂の様をよろよろと詠んだところが、

飯田ヒロ子選

③凍滻の芯にかすかな水の音 安藤 玲子

凍滻の芯とした所が、荘厳な景の奥に息

づく、いのちの働きをうまく表現している。

井沢とよ子選

⑩大仏はますます猫背山眼る 安藤 玲子

「山眼る」は「冬山惨淡にして眠るが如

し」から冬の地理の季語となつた。作者は冬に入り山も眠りについてある頃大仏を見上げると背中をますます丸め静かに冬をしのぐよう見えた。現実に大仏が猫背になるはずも無いが猫背に見えた。それもまた冬の所に豊かな感性があり詩情があると思う。好きな句です。

糸賀睦子選

③凍滻の芯にかすかな水の音 安藤 玲子

凍滻の芯ですかり氷り付いた寒々とした景、しんとした中にかすかな水の音が聞え

宮本喜実世選

⑯雪催い変わぬ弱さ持ち生きる 山口 富雄

雪の季語と人の弱さをボロリと出した句。

佳句と思ひます。

小沼悦子選

⑭寒稽古一瞬青き風が過ぐ 宮本喜実世

空手を思いうかべる一瞬の突き、それを

「青い風」とどらえたこと、寒稽古の厳しさを旨くいえた一句だと思います。

小松崎黎子選

⑤人ひとり加わり焚火持ち直す 宮路 久子

焚火の火勢がよくみえる句、人がひとり

加わり座のにぎわいも読みとれる句。

菅原仲江選

⑩寒稽古一瞬青き風が過ぐ 宮本喜実世

寒さの中での寒稽古青い風が過ぐとは、

寒真只中の空氣感と青春の青とが相俟つて

きりとした一句になつてゐる。剣道弓道柔道の一瞬の動きがクローズアップされ、

目の前に展がつて来る。

高野紀世子選

⑭寒稽古一瞬青き風が過ぐ 宮本喜実世

技の決つた一瞬の静寂を「青き風」との表現がとても良かつたです。

高橋和彌選

①水戸学の尊皇攘夷淑氣満つ 森井 省一

水戸学の道を訪ざれても、弘道館を押しても、正しく尊皇攘夷のビリツとした淑氣を感じる。言い得て妙とはこのことと思う。

受贈誌紹介

「亞」2021年十一月号（代表・長谷川進）

浜菊の後ろ盾なる水平線

便り絶え月耿耿とあるばかり

交番の店子で暮らすつばくらめ

木の実落つ柩に寄りて五六人

十二月号

遺言書作る話や賜猛る

幸せを等分に割るふかし譜

初秋魚港市場の啖呵売り

秋風や昔なじみの饅頭屋

2022年一月号

くり返し炭素を叩く初ぶいご

年新し自撮りの奥に遠筑波

どやどやと正月が来る神の前

幸せは見付上手の梅一輪

一月号

師走来る賢治の汽車に夫のりて

年越しの一人欠けたる不運かな

冬晴れや神に供えし宝くじ

凍てる夜の改札口の別れかな
「ひたち野」2021年十一月号

長谷川 進

飯田 和恵

北田 久雄

黒澤みどり

秋山ふさこ

梅井 玲子

高橋 和彌

宮本喜実世

長谷川 進

新井 洋子

井坂 あさ

野村 洋子

2022年一月号

くり返し炭素を叩く初ぶいご

年新し自撮りの奥に遠筑波

どやどやと正月が来る神の前

幸せは見付上手の梅一輪

一月号

師走来る賢治の汽車に夫のりて

年越しの一人欠けたる不運かな

冬晴れや神に供えし宝くじ

凍てる夜の改札口の別れかな
「ひたち野」2021年十一月号

十二月号

印南 美都

栗田 幸一

群群と土手に炎を置く曼殊沙華

年金を引き出す列に付く残暑

2022年一月号

この道の裾野に続く叢薄

山陰の伸びる早さや蕎麦の花

閉め残す雨戸一枚十三夜

風が風追ひ越してゆく芒原

2022年一月号

磨かねばならぬものある年用意

病床の母につく嘘小六月

遅月忌の法灯を繼ぐ烏瓜

縄飛の縄の中なる小宇宙

「むつみ」第二七四号（会長・大野ひろし）

植木屋の余さず使ふ冬至の陽

正論の時に疎まる振れ花

百年に一度が何度秋出水

国難にのらくら巻けり真葛原

坂場 俊仁

高木 静水

石田誠一郎

栗田 百子

2022年一月号

人曰や家族の前に大座る

叫ぶこと忘れちまつて月仰ぐ

空っぽの電話ボックス秋の声

不变とはいかぬ今生霜の声

矢口 悅子

2022年一月号

磨かねばならぬものある年用意

病床の母につく嘘小六月

遅月忌の法灯を繼ぐ烏瓜

縄飛の縄の中なる小宇宙

「鶏鳴」2021年五四号（編集長・山田健太）

台風のしつばがたたく鹿島灘

蟻素通り大黒柱を磨く祖父

秋冷や釦せんぶを掛け終はる

重力のある星がいい落葉踏む

「龍の玉」2021年十一月号

大野ひろし

高橋 和彌

淀名和さち

白土 昌夫

金子 嵩

清水二三子

中川 芳子

犬山 京子

2022年一月号

人曰や家族の前に大座る

叫ぶこと忘れちまつて月仰ぐ

空っぽの電話ボックス秋の声

不变とはいかぬ今生霜の声

矢口 悅子

2022年一月号

磨かねばならぬものある年用意

病床の母につく嘘小六月

遅月忌の法灯を繼ぐ烏瓜

縄飛の縄の中なる小宇宙

「鶏鳴」2021年五四号（編集長・山田健太）

台風のしつばがたたく鹿島灘

蟻素通り大黒柱を磨く祖父

秋冷や釦せんぶを掛け終はる

重力のある星がいい落葉踏む

「龍の玉」2021年十一月号

大野ひろし

高橋 和彌

淀名和さち

白土 昌夫

糸賀 瞳子

森井 省二

安藤 玲子

宮路 久子

根本菜穂子

矢須 恵由

金澤 踏青

竜子 雅子

河野 正子

洗濯のすなおに乾く冬日和

年の瀬や空の返事の多くなり

過去形で語った時の青みどろ

益くれば茄子の馬立つ辻の角

夕霧や備後訛の聞えそう

句会探訪

『いしおか俳句同好会』

の方々に触れていただき、作者の思いと感動を共有する文芸でもあります。日常の生活においても、俳句に親しむ効能は計り知れない素晴らしい働きをしています。昨年は県の芸術祭参加俳句大会に応募して第一位を取った人、また他の大会で文部科学大臣賞を受賞した会員もあります。新年句会も熱心な勉強の成果を大きな収穫として午後四時、散会しました。

昭和四十七年十月、醍醐味風先生の呼び掛けで、いしおか俳句同好会が発足しました。翌年の第六回から市の文化祭参加俳句大会に加わり、令和元年十月、高橋和彌先生を講師にお迎えしての第五十二回大会を最後に、当大会は中止にしました。コロナ禍の会場が密になるため、そして会員から当俳句会が文化祭の「俳句大会のみに存在するかの如く」を改めたいとの要望もあり、会員を中心とした独自の境地を開いてゆくことにしました。

前文はさて置き、令和四年一月九日、新年最初の例会を国府地区公民館にて、午後一時出席十七名（欠席三名）で「俳句は楽しく、生き甲斐に」をモットーに出句三句、七句選に入り、初代、二代（石神秋羅先生）会長から会長十句選を私も踏襲、「作品は作者を離れた瞬間から読者のものになる」この言葉を噛みしめて、無言の静けさが会場を包みました。俳句は自分だけのものではなく、多く

衰へを隠しきれない冬薔薇
コロナ禍を清拭したる大白鳥
出窓より入る初日と福の神
尾を上げて孤高の猫と雪野原
藍色の刺子一閃寒稽古

一月定例句会
一色しのぶ
岡野はつ子
菅野憲枝
小泉ちよ子
高橋富士恵
田口 美子
田端 俊行
野村 洋子
福田 泰夫
森田 愛子
前野 みよ
松崎 淑子
森 まさえ
山口 美津子

駅伝の実況いつか寢正月
未完の句数多並べて年新た
(小池つと夢記)

若色 茂



「感動を与える」

とく ぐいち

抱負を聞かれたアスリートが「頑張つて見ている人たちに感動を与える」などと答えるのをよく耳にする。これを「自己中」だと感じるのは「感動を与える」ではなく「感動していただく」といったん見ている人を中心とした文脈への置き換えがないからだ。言いかかるとこれは古くからの日本人の他者対応の基本で、主（自己）より客（他者）を第一とする謙譲の美德もある。そしてこのことは詩型が短いので片言的になる俳句が、他者の読みを予め取り込んで句作するのに通じている。とは言え、日本語の地殻変動ともいうべき「感動を与える」発言は「自己中」以上に成熟しつつある。例えば、陸上長距離の新谷仁美の東京五輪に対するコメントがそれだ。「コロナ禍に關係なく、スポーツにネガティブな意見を持つ人は当然いる…その人たちの気持ちに『どう寄り添えるか』が重要。…応援してくれただけに目を向けるようじゃ、私は胸を張つて『日本代表』ですとは言えない：アスリートは競技で結果を出して『じやあいいよね』っていうわけではない…自分

本年度もいろいろと執筆をいただきました方々に、御礼を申し上げます。

今後とも、どうぞよろしくお願ひ致します。

「平和の祭典」北京冬季オリンピックが開催されている中、ロシア軍によるウクライナ侵攻が、取り沙汰され何やら世界中が、きな臭くなっています。

国内では、オミクロン感染の恐怖と、闘う日々が続いている状況で、未だ収束も見えません。令和四年度には、新たな活動計画が遂行実現され、皆様の俳句や近況等を多く掲載出来る事を願っております。

（高野・佐藤）

令和四年三月 第140号

発行人 高橋 和彌

発行所 茨城県現代俳句協会

〒312-0111 ひたちなか市中根三六〇〇一-二六七

編集人 高野 よしこ

編集所 〒311-3513 行方市手賀二四一六

事務局 〒307-0001 結城市結城二二〇八七一七

山口 富雄方

印刷所

〒315-0013 茨城県石岡市府中一三一
石岡印刷有限会社

あ
と
が
き